松本清張全集 21

松本清張全集 21

松本清張全集21 小説東京帝国大学・火の虚舟

定価 1400円

1973年4月20日第1刷 1978年4月15日第4刷

著 者 © 松本清張

発行者 樫原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町3

電話(代表)03—265・1211

印刷所 凸版印刷株式会社

落丁乱丁はお取替えします

小説東京帝国大学　3
火の虚舟　347
解説　青地　晨　489

装 帧 伊 藤 憲 治

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

小説東京帝国大学

哲学館事件

明治三十五年十月のことである。

私立哲学館では、二十五日から三十一日に亙って卒業試験が行われた。臨監として文部省から、視学官隈本有尚、同隈本繁吉、その他の属官が毎日同館に出向いていた。哲学館というのは、現在の東洋大学の前身で、当時本校の卒業生には文部省の中学校、師範学校教員の無試験検定認可の特典があった。

倫理の試験問題の担当は、講師中島徳蔵だった。設問は「動機善にして悪なる行為ありや」というのである。

生徒の提出した答案は中島が採点する。それを視学官が閲覧する。

隈本有尚視学官は、その採点された答案の束をぱらぱらとめくっていたが、どうしても点のいいぶんに眼が走る。そのうち、最高点をつけられた答案を一瞥して、彼の眼は光った。

視学官は、その答案を引出して、もう一度熟読した。その答案内容は文部省が引揚げてしまったので、現在は伝わっていないが、おそらく次のような趣旨だったであろう。

人は彼が予知せざりし結果に対しては、これを予知せざりしといふ事実に責任ありと言はばともかく、その結果そのものには責任ありといふを得ず、且つ又単に彼の志向に止まりて動機ならざりし結果の部分をみて、これに善悪の判断を下すべきものに非ず。然らずんば自由のために弑逆をなす者も責罰せらるべく、自ら焚殺の料に供せんが為に溺死にひんせる人を救へる暴君も弁護の辞を得べし。ただそれ吾人が動作全体を計算し、(一)その結果が全体として善なるか、はた悪なるか、(二)これらの結果が当の目的なるかの問題に答へたる後、吾人は初めてこれにつきて道徳的判断を立つるの権利ありとするなり。

この生硬な文章は、ムイアヘッドの倫理学(The Element of Ethics by Muirhead)を桑木厳翼が翻訳したもので、これを哲学館では教科書に使っていたのである。答案を書いた生徒はほとんど教科書どおりに書いたというから、大体、右に似た文章だったと思われる。

隈本有尚視学官が注目したのは、この文章の中にある「弑逆」のくだりだった。

教科書に載っている学説は、つまり、結果だけを見て善悪を判断すべきでなく、肝心なのはその動機の判断にある、したがって、動機が人民の「自由」を護るという「善」から出ているなら、弑逆をなすもまたやむを得ない、という趣旨である。「自由」を第一義とし、人間の行為をその下に置く倫理論だ。

英人ムイアヘッドが、ここに「弑逆」という文字を使ったのは、明らかにイギリスのクロムウェルがチャールズ一

世を弑逆した歴史を指しているのである。彼によれば、自由は最高の「善」であるゆえ、それを守るという動機も善であるから、チャールズ一世のような帝王を弑逆しても咎められることはないと解釈する。

さて、視学官隈本有尚は、この答案を抜き出して同僚の隈本繁吉に見せた。隈本繁吉もそれを読み、同僚の疑問に賛成した。

「中島さん」

と、隈本有尚は休憩室に中島講師を呼び入れた。手に持った例の答案を前に出して、

「あなたは、これに最高点をおつけになっているが、それについて少々伺いたいことがあります」

と、湯呑の茶を啜って、じろりと中島徳蔵を見た。隈本は中島より年齢が上で、哲学館長井上円了とは同窓であった。従って、中島とも日ごろから相識の間柄だった。

「はあ、何でしょうか？」

「この学校ではムイアヘッドの著書を教科書に使っているようだが、あなたは、このムイアヘッドの説の講義に批評を加えて、学生に教えていますか？」

これに中島徳蔵は何の考えもなしに答えた。

「教科書にあることは、教師が大体、この程度のことなら生徒に理解できると認めた上で教えているので、別に講義に当っては、批評を加えていません」

「ああ、そう」

隈本視学官は、あとの言葉を捜すように黙ったが、

「そうすると」と、顔をあげて訊いた。「この理論からゆくと、伊庭のやったことはどうなりますかね？」

「はあ？」

中島講師は唐突な質問に遇ったように眼をむいた。

伊庭とは、前年の三十四年六月に東京市参事会員で遞信大臣の経歴を持った自由党の領袖、星亨を暗殺した伊庭想太郎のことである。星は、当時、汚職の元兇のように新聞で叩かれていた。伊庭が義憤に駆られて東京市参事会室に入って匕首を持って星を刺したのである。世間に衝撃を与えた事件だ。

取りようによっては、隈本の問いは、意地の悪いものだった。

「いや、あれはいけません」

と、中島講師はややあって答えた。

「どうしていけないのです？　伊庭は私憤で星を殺したのではない。星が公共の敵であると考えての犯行ですよ。しからば、その動機は善ではないですかね？」

視学官は突込んだ。

「いや、伊庭の動機は、主観的なもので、感情的です。こういうのは善とはいえません」

ここまでくると、中島にも隈本の質問の意図がおぼろに分ってきた。果して隈本はつづけて訊いた。

「しかし、動機が善であれば弑逆も悪にならないのではな

いかね。この教科書の論理でゆけば、そうなるようですが」

両隈本視学官は中島の顔を見つめて、返事を待ち受けた。

中島は慎重に答えた。

「ムイアヘッドの説は、弑逆が絶対的にいいことだというのではありません。ただ、やむを得ざる非常の場合、しかも、その動機が善と認められた場合のみを指しているのです」

こういったあと、相手の考えを先回りするように急いであとを付け加えた。

「しかし、これは外国のことです。日本では、そのような不祥事は絶対にありませんから、問題外です。西洋では、チャールズ一世を殺したクロムウェルの行動を、どの史家も是認しているところです。ムイアヘッドの説くところは、そういう点にあると思います」

「ああ、なるほどね」

隈本視学官は、分った、というようにうなずいた。

そのあとは、両視学官とも接待の菓子をつまみ、茶を啜った。毎年臨監に来た役人が引揚げるときと少しも様子が違わなかった。

「では、これで」

と、二人の文部省役人は起ち上がった。

「ご苦労さまでした」

と、中島は二人を玄関に見送りに起った。

隈本有尚視学官は、哲学館の玄関から歩き去った。和やかな挨拶を残してである。

中島講師はひと息入れた。――

生徒の答案の「弑逆」のところがひっかかったが、あれはどこまでも西洋の歴史に立った西洋人の理論である。わが国体には関係のないことだ。その辺は両視学官とも分ってくれたらしい。

答案を書いた生徒は、この学校の秀才で、工藤雄三（くどうゆうぞう）という者だった。この生徒は、教科書どおりの趣旨を書いたにすぎない。しかし、中島の印象では、隈本視学官は桑木厳翼の翻訳から採ったこの教科書のことを今まで気づかなかったようである。いや、原著も、翻訳書の存在も知らなかったのではなかろうか。生徒の答案ではじめて分ったような様子である。

しかし、中島徳蔵は、そのあとも隈本視学官の質問が気になって仕方がなかった。なるほど、生徒の答案は誤解されるおそれがないとはいえない。現に視学官の質問は、それを曲解した上で発せられたようであった。しかし、隈本は倫理学者で、直覚説を信奉している。直覚説はグリーンやムイアヘッドの実証説と対立している。隈本にはそのへんの意識もあるようだ。（注　直覚説においては、行為の善悪正邪は、直観的に判別されるものを善とする。これに対して実証説は、万人に対して合理的に定義、証明できるものを善とする。）

中島は、なんとなく天の一隅に暗い雲を見るような思いがしたので、十一月初旬、文部省に隈本視学官を訪ねた。もう一度説明をして、十分な了解を取りつけておくつもりだった。

役所の応接間に待っていると、隈本視学官がふらりと入ってきた。

「今日は何ですか？」

と、ぞんざいに椅子に臀を落した。

「先日の卒業試験の生徒の答案のことですが、それにつきまして、もう一度、あなたにぼくの意見を聞いていただきたいと思いまして」

中島は、忙しいところをお邪魔して済まない、と詫びた上で云った。

「ははあ、それは、この前ぼくがあなたに尋ねて、ひと通りは承りました」

隈本は、あまり弾まない顔をしていた。

「あのときは怱卒のことで、まだ意を尽した答えができたとは思っていません。それで、今日はそれを補足し、十分な説明をさせていただきにあがりました」

「そうですか。じゃ、まあ、聞きましょう」

視学官は椅子の上に斜めに構えた。

「ムイアヘッドの倫理学の動機についてですが、その解釈は人間の善意というものを最高至純なものとした立場から説かれています。……」

中島は、その動機論を縷々として述べた。

隈本は彼の長い話に黙っていたが、聞いているのか、いないのか、眼を別なところに向けている。もっとも、椅子に坐った彼の姿勢が初めからそうであった。

中島は、そのあとさらにつづけた。

「……そのようなわけで、このムイアヘッドの動機論は、決して国家の秩序を破壊しようというものではありません。弑逆に関しての説も、すでに早くから孟子がありますが、ムイアヘッドのは孟子のような架空論ではありません。動機が善なれば弑逆を是認することもあるというけれど、その動機の善とは、もちろん、実行者の勝手な意志に任せるというのではなく、また不合理な動機は絶対に許されないという前提の上に立ってのことです」

隈本視学官は、ときどき仕方なさそうに、はあ、とか、うむ、とか云って聞いていた。

その興味なげな態度を見て中島は不愉快に思ったが、敢えて釈明につとめた。

「したがって、これは皇統連綿たるわが国においては夢にだも見ることのできないことで、前にもお答えしたように、あくまでも外国の君主制に対しての論理です。恐れ多くもわが皇室には、もとより、かようなお方が出られたことは一度も無く、国民は、その御仁慈を、ひとしくお慕い申しあげています。英国人ムイアヘッドは、初めから日本国体というものを知らずにこれを書いたのです。とにかく、以

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

上申しあげたように、これはあくまでも西洋歴史の上にのみ適用されることで、その点、あなたのご了承を重ねて得たいと思います」

隈本は中島の言葉が終るのを待って云った。

「いろいろご説明を承ったが、その程度の説明なら、なにも今日わざわざお見えになることはなかった。先日、学校で伺ったときとあまり違ってないように思われますが」

「はあ、いえ、あなたには、すでにご理解を得たとは思っておりますが。……ただ、今度は」

と、中島は少しあわてたように、持参していた風呂敷包を解いた。その中から二冊の本を取出すと、視学官の前に差出した。

「わたくしのこの見解は、今日に始まったのではありません。すでに明治三十一年度の帝国教育会でわたくしがおこなった講演でも、それは述べてあります。ここに、その講義筆記がありますので、ご参考にご覧ねがいたいと思います。また、三十三年度哲学館で出版した『倫理学概論』の中には、孟子の弑逆説を排するの書、および日本国体の精華論が述べられてあるので、どうぞ参考にご覧願いたいと存じます」

隈本視学官は、それを手に取った。二冊の本を彼はぱらぱらとめくっていたが、

「じゃ、お預かりしておきます」

と、簡単に云ったが、それほど熱心を示すふうでもなかった。

「そこに書いてある通り……」

と、中島がなおもつけ加えようとすると、視学官は、

「いや」

と手を振り、いま、高等官会議が迫っているから、これ以上、説明を聞く時間がないと迷惑そうな顔をした。

中島徳蔵は、何となく落ちつかぬ気持で文部省を辞した。隈本視学官の態度は、こちらの云うことを了解してくれているようでもあり、まだ十分に理解していないようでもある。あの無愛想は、万事理解したから、もう、それ以上よけいなことを聞かされなくてもいいというふうにも取れるし、また、すでに彼が一つの予断を持って、今さらこちらの弁明に耳を傾ける必要はないというふうにも取れる。

中島は不安になって、哲学館に帰ると、このことを他の講師たちに訊いてみた。

「視学官がそれ以上突込んでこないのは、了承したからではないでしょうか。ムイアヘッドの倫理学は、わが国でも定評のあるものだし、一般論だから、そう心配することはないでしょう」

と、いずれも慰め顔に云ってくれた。

中島も、それで少しは気持が落ちついた。すると、数日経って、彼のひそかな不安を再び掻き立てるような噂が流れた。

「文部省では、哲学館で教えている倫理はわが国の国体に

合わない不穏な学説なので、どうやら卒業生の教員検定試験免除の特典を取上げるそうな」

というのである。

私立哲学館は、明治二十年九月、東京府本郷区竜岡町三一番地に創立された。創立者は「妖怪博士」で有名な井上円了である。井上は、もともと仏教徒の子に生れ、その思想は、東洋哲学というよりも、仏教哲学ないしは印度哲学に近く、仏教を改良して、これを世界の宗教たらしめんという理想を抱いていた。明治十七、八年ごろにフランス流の自由平等思想が流れ込み、民権運動の理論的な背景となった上、同時にベンサム、ミル、スペンサーなどの英国流の合理主義哲学も入って来たので、井上は、これに対抗する東洋主義の哲学を起そうとしたのである。

むしろ、彼は国体擁護の愛国者で、明治二十年には「仏教活路序論」を刊行して、その護国精神を説いている。

井上が哲学館をつくったとき、その後援者としては近衛篤麿、後藤象二郎、副島種臣、勝海舟、芳川顯正、陸奥宗光、谷干城などの名士がずらりと顔をならべたものだった。

その愛国主義的な哲学館がこともあろうに国体に悖る倫理学を講じて文部省に睨まれているというのである。文部省が、私立学校の生命である卒業生の教員検定試験免除の特典を取上げるかもしれないという風聞は、哲学館にとって不意に雷鳴を聞いたようなおどろきだった。

しかし、この噂は、その年の十一月半ばになって真実となって現われそうになった。

その月十六日のことである。文部省普通学務局長事務取扱岡田良平の名で一通の公文書が学校に舞込んだ。

中島が急いでその封を切ると、中から出てきたのは、朱の罫に同じく文部省の活字のある用紙に墨で黒々と書かれた左のような意味の照会文だった。

「貴館教育部第一課の倫理学では、動機と行為との関係を如何なる趣旨のもとに教授せられているか、その詳細を承知したく、照会いたします。なお、去月二十五日施行した本文学科目試験の生徒答案は直ちに差出されたく、申し添えます。

私立哲学館長　文学博士　井上円了殿　」

公文書である。

中島徳蔵は、あのときの視学官との口頭問答だけではやはり、文部省が納得していないことを知った。いや、隈本視学官は、あの説明だけでは足らず、上司にこれを報告し、改めて岡田普通学務局長事務取扱から公文書による問合せを出させたのだと察した。そこに隈本の底意が見える。いうなれば、試験答案に一視学官が些細な疑問を発見して、おのれの成績を上げる機会を摑んだのだ。

だが、文部省のこの文書はあくまでも照会である。これに対して弁明すれば、なんとかおさまると、中島は考えた。隈本視学官もここまでおのれの働きを上司に見せたら、もはや、十分なはずである。これ以上追討ちはすまい。また

追討ちされる落度もないと思った。が、ことは、巷間の風聞となっている中等教員無試験資格の恩典を取上げられそうな危機にも絡んでいたので、安心はならなかった。

が、まさか、そんなことはあり得まい。あの噂は単なる臆測だと胸に納得させた彼は、この照会に対する回答だけは丁寧にしなければならぬと思った。早速、その手続きにかかった。

館長井上円了はヨーロッパに旅行中であった。留守中の館長代理格の中島は、早速、答申文をつくって文部省に提出した。

「本月十六日付で御照会の、本館教育部第一課の倫理学で教授した動機と行為との関係については、別紙倫理学担当講師中島徳蔵より申し出た趣旨に相違ありません。念のため、ムイアヘッド原著桑木厳翼補訳『倫理学』を一部添えて答申いたします。

明治三十五年十一月十九日

私立哲学館長　文学博士　井上円了」

文部省普通学務局長事務取扱　岡田良平殿

つまり、中島徳蔵は、当事者の講師としての彼と、館長代理としての彼と、一人二役で、この答申を文部省に提出したのであった。

文部省に釈明の答申書を送ったが、それだけではまだ中島の心は落ちつかなかった。

不安なのは、今度のことで文部省が中等教員無試験検定資格を取上げるという噂があることだ。それがまんざら嘘とも思えない。もし、そうなったら、哲学館の存立にかかわる大問題である。

実は、今度の問題は井上館長も、外国に出発前に知っていた。ただ、洋行が間近に迫っているため日程を延ばすわけにはいかず、館長はこの処理を中島講師に一切任して出発したのだった。井上も、そのときは楽観的で、大したことにはならないという予想だった。館長もやはり見通しが甘かったことになる。

わざわざ公文書で照会を発した文部省の肚には、かなりな決意が窺われた。

中島は、役人というものは、一般の考え以上にことを重大に持ってゆくものだと思った。ことは視学官隈本有尚のちょっとした注意から起ったのだが、今や文部省全体が官僚の事大主義にふくれつつある。

しかし責任者だけに、中島は今後のなりゆきが懸念されてならなかった。

すると、教科書の検定問題に詳しい或る友人が中島の困惑を見かねて助言してくれた。

「検定委員長である山川健次郎氏に一度会って了解を得たらどうか。山川さんは東京帝国大学の総長でもあるしね」

耳よりな忠告であった。

中島は、早速、手土産をととのえ、人力車に乗って、小石川原町から本郷初音町の山川家に向った。これが明治三

十五年十二月八日のことである。俥の幌の隙間から入る風はもう寒かった。

途中では、鈴を鳴らして号外売りが走っていた。中島には思い当ることがあったので、

「おい、あの号外を一枚買ってくれ」

と車夫に命じた。

「へえ、承知しました」

車夫は横を走り抜ける号外売りの少年を呼びとめた。中島は、財布から五厘玉を出した。

「先生、教科書問題が、どうやらえらい騒ぎになるようでございます」

車夫は号外の見出しをちらりと見て渡した。

中島は、走る車上で活字に眼をさらした。

《教科書事件の火の手はいよいよさかんにして、すでにその筋に拘引されし者、県知事、師範、水産、小中諸学校長、その他軍人、前代議士、県会議員ら無慮六十名に達し、なおますます醜吏の拘引せられる者多からんとし、わが教育、社会の恐慌まさにその極度に及ばんとせるが、またまた一昨日より昨日へかけ、その筋へ拘引されたるは、茨城県師範学校教員、同県視学、小学校長ら三名にして、いずれも任地において拘引され、東京に向けすでに護送の途につきたる由。なお、他の連累者およそ二十名も今夜中には拘引さるべしとのこと。

本件の被告はすでに六十名に達したれば、取調べに手数ひとかたならざるをもって、予審部にては川島、森井の両刑事を動員し、また検事局にては昨日より、古森、溝口の両検事を補助となしたり》

読み終って中島の心は暗くなった。同じ教育にたずさわる者として、今度の事件は彼も世間に遠慮な気持である。

小学校教科書を発行している書店の金港堂、集英堂、普及社などが、教科書の売込み競争のために地方の学校教師や県、郡視学を買収した事実が判って、目下、その摘発が進んでいる。各書店は大ぶん大仕掛な贈賄をおこなったとみえ、県知事、県会議長などの身辺にも捜査の手が伸びているらしい。

この号外の様子では、まだまだ連累者が出そうである。昨日の新聞には、近日、文部省にも火がつくように書かれてあった。教科書関係の役人が収賄している嫌疑だ。

しかし、中島は、いつまでもこんな号外の記事に気を取られてはいられなかった。目下の彼自身の問題とはかかわりの無いことで、また潮がさすように心に戻ってくるのは、これから訪ねる山川検定委員長の円満な了解が得られるかどうかの成否だった。

山川は国粋主義者である。それはかねがね中島も聞いて知っていた。この会津白虎隊生き残りの教育家に、果してムイアヘッドの「倫理学」の精神が理解されるであろうか。しかも、山川の専門は倫理学とは畑違いの理科であった。

が、一方では、いくら山川さんでもまさか、そんな分ら

ぬことは云わぬだろうという気休めも中島にはあった。理科の出身だが、東京帝国大学の総長の現職にあるのだから、他の学科についても分らぬはずはあるまい。総長といえば、法、文、理、工、医、農各学科の教授を統率している大学の行政官だ。頑固だといっても、この程度のことは理解してくれるはずだ。——中島の思案は、その乗っている俥のように左右に揺れていた。

それにしても、あの工藤雄三という学生の答案に自分が最高点を与えなかったら、こうまで問題にはならなかったに違いないと思い返された。むろん、信念からすれば、工藤という学生は教科書どおりの趣旨を会得した答案を出したのだから、最高点を与えても後悔はしていない。しかし、あの採点が隈本視学官に誤解を与えたのではあるまいか。たしかにムイアヘッドの説を、わが国体観に置くと、存外な誤解を招くおそれがないでもない。隈本視学官にしてあの通りであった。山川総長が、どのような反応を示すか、その家が近づくにつれて、中島は胸が騒いだ。

俥は初音町の山川家の前に着いた。その家は表通りから引込んだところで、あたりは雑木林と藪がある。

黒門があって、敷地に沿うて竹垣がめぐらされてある。門を入ると、かなり広い庭で、無造作な木立になっていた。その雑木の間には畑があった。玄関につくまでの右側には、頭の半分こわれた石の牝牡の狐が据えられてあった。まるで旧旗本の屋敷跡のようである。

玄関は格子戸も無く、いきなり式台があって、正面の半分が壁になっていた。広いが、古い家であった。格子戸の付いた内玄関は、玄関から引込んだ右側に別にある。

中島は、ずいぶん風変りな家だな、と思った。この奇抜な家を見ただけでも主人の気風が知られて、彼には早くも半分絶望感がきた。

中島は式台の手前に立って、ご免下さい、と大きな声を出した。眼の前の壁には、どういう趣味からか、掛軸が下がっている。漢詩のようだが、山川の筆蹟かどうか分らなかった。

「どちらからですか?」

と、ふいに壁の左手の障子から、絣の着物に、くたびれた袴の、二十一、二ばかりの書生が出た。

名刺を出すと、書生はいったん引込んだ。中島は、その間に漢詩のつづきを読もうとしている。心の中では、山川さんは書生が好きだというが、今の男もその一人かと思い、この家には何人ぐらい書生を置いているのだろうと思った。気持が緊張し切ると、かえって、余計なことを考えるらしい。

「どうぞお上がり下さい」

通されたのは裏側で、十畳ばかりの部屋だが、戸障子、畳のほか、飾物らしいものとて無かった。木の根をえぐってつくった火鉢はあるが、縁側の障子が少しあいていた。そこから池の一部が見える。黄色く澱んだ水は、うすら陽

をうけている。池の端には葦が枯れていた。見ただけで中島は寒さを覚えた。

廊下に咳が聞え、白い、いがぐり頭の痩せた男が入ってきた。顔色がおそろしく黒い。それだけに、眼の光が強かった。

「突然、お邪魔いたしまして」

中島徳蔵は座布団をすべり、主人の前に手をついた。

「どうぞ火鉢にお当り下さい」

東京帝国大学総長、教科書検定委員長山川健次郎は、その火鉢をへだてて客の真向いに端然と坐った。顴骨が出て、顎が尖っている。咽喉には数本の筋が浮いていた。眼が太い。

「名刺を拝見しましたが、哲学館にお勤めだそうで」

山川は煙管に莨を詰めながら、よく光る眼で中島の全体を一瞥した。

「左様でございます。哲学館では倫理学を講じております」

と、中島はいくらか卑下に似たものを感じながら答えた。やはり私学校に勤めている怯け目であった。東京帝国大学総長の前である。

しかし、中島の今日の用事は、東大総長としての山川を訪問したのではない。教科書検定委員長に会いに来たのである。

ひと通りの挨拶が終ると、中島は思い切って、すぐに本題に入った。これまでの経緯を述べ、ムイアヘッドの倫理学の要旨の大略を説明した。それが、桑木厳翼の補訳から哲学館の教科書に採られていること、そして先日の試験問題答案と隈本視学官との問答にいたるまでを語った。

山川は、ときどき唸るような短い返事をして聞いていた。煙管は、山川のうすい唇と火鉢の縁の間を往復した。

相手の表情を読み取ろうとしたが、中島にはその反応が全く分らなかった。

「左様なわけで、視学官には了解を得ているつもりです。先日も文部省を訪い、説明して参りました。また、文部省からそれについて照会の公文書が参りましたので、同じ趣旨の答申もしておきました。ところが、最近、この倫理学の趣旨が不都合であるという廉で、文部省ではわが哲学館に与えている恩典の中等教員無試験検定資格を取上げようという動きがあるように聞いております。わたくしどもとしては大へんに心痛しております。丁度、井上館長もいま洋行中のことではあり、わたくしがその代理をつとめておりますが、しかし、今度の問題の当事者でもございます。そこで、教科書検定委員長たる先生に、ぜひ、このことでご了承を得に参りました」

云い終って中島が頭を下げると、山川は、赤銅の雁首をひとつ火鉢に叩いた。

「左様ですか」

山川は、口の端を曲げて考えていたが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com